

大学院教育学専攻セミナー
道徳教育のこれから
—未来への展望と具体的展開—

Moral Education in the future
—Prospects of moral education development—

講演者：押谷由夫*

OSHITANI, Yoshio*

○司会（佐藤幸治：武庫川女子大学）

今日講演していただく押谷由夫先生です。

○押谷由夫（昭和女子大学大学院）

押谷です。よろしくお願いします。

○全員

よろしくお願いします。

○司会

押谷先生は、広島大学の大学院を出られて、その時うちの武庫川の教育研究所にお勤めの新堀通也先生の教育社会学の教室で勉強をされていました。広島大学大学院を出たあとは、四国の高松や高知の大学で教鞭をとられていたのですが、そのあと、文部省、文部科学省の前の文部省は分かれますね、そこの道徳の教科調査官の仕事がされました。道徳は教科ではないんですけども、教科調査官、そうですね、全国の小学校中学校の道徳教育の実態をいろいろチェックしたり調べたり、その仕事も大変激務ですけども。何年くらいされていましたか。

○押谷由夫

13年弱。

○司会

13年。そのあと、東京の昭和女子大学に勤められて、現在はその大学院で教鞭をとられています。道徳教育の第一人者であります。日本の道徳教育を背負っておられます。私の方はちょっと邪魔をしているんですけども（笑）。今日は実りのあるお話が聞けると思います。よろしくお願いします。



（講演者：押谷由夫氏 昭和女子大学大学院）

○押谷由夫

みなさん、こんにちは。今、佐藤先生から紹介いただきまして、僕はこの武庫川女子大学と親しくさせていただききっかけは、新堀通也先生が広大を定年退職されてこちらにこられて、それからなんですよね。実は、新堀先生がね、その後ほんとにいろんなところで「武庫川女子大学は最高だ」と書かれているんです。僕は、授業を真剣に聞いていたかな、とちょっと心配になるところもあるんですけどもね。新堀先生は大変学究肌なんですけれども、どちらかというところボソボソ話されるものですからね。でもね、「僕には最高だ」って言われるんです。いろんなところに書いておられるんですよ。聞くとところによると西日本一大きな女子大ですからね。それで、この武庫川女子大学と縁をもたせていただくことになったんですけども。もうひとつ、最近のエピソードなんですけれども、8月15日に中学校の同窓会があったんです。私、今年はまだ59なんですけれども、60になるんですよ。それでまあ還暦を祝ってみんなで同窓会をやるんじゃないかと。まあ45年ぶりになりますよね。その時に僕らは何を期待するかと言ったら、いわゆるマドンナですよ。中学校の時のね。そのマドンナがどういう状態で年をとっているのかなあなんてワクワクしながら行くんですよ。何人かマドンナがいたんですが、その中で一番のマドンナが、僕と同じ町内だったんですけど45年ぶりにお会いしたんです。そしたら、すばらしい形で年をとっておられて、安心したんですよ。それで、話していると、実は武庫川女子大出身なんです。それで「今度僕行くんですよ」と話したら、「うわあ、いい大学だった」と言ってね、話してくれたんですよ。大学卒業して40年近く経つでしょうかね。武庫川女子大をいつも心の支えにして、昔のイメージのマドンナそのままに年をとっておられるようでした。さすが武庫川女子大学、うらやましいと思いました。昭和女子大もそうありたいなと思っているところなんですけれどもね。

さて、そういうことで大変心惹かれるこの武庫川女子大学でみなさんとお会いさせていただけるということで、大

* 昭和女子大学大学院 (Showa Women's University)

変光栄に思っています。どうぞよろしくお願ひします。

○全員

よろしくお願ひします。

○押谷由夫

今日は長丁場ですので、座りながらお話ししたいと思います。

さあ、どうでしょうね。この東日本大震災、関西の方では揺れたんですかね？3月11日ね。東京でも大いに揺れたんですけれども、実はその時、佐藤先生とも東京で一緒だったんです。先生は16年前、阪神淡路大震災も体験されていて、それと比べてちょっと違う感じだなあって冷静に分析されていました。地震にあつて損したりもしたんですけどね。

さて、道徳教育。基本的には、人間としてどう生きるかということをしつかり考える、そういう分野ですよ。これからの道徳教育を考えるときに、今一番大切にしなければならぬのは、その大震災の悲しみのなかで、一所懸命に生きようとされているみなさん方を応援するような、あるいは、そういったところから学んでいけるような、そういうものを提案していかなければならないんじゃないでしょうか。僕はそれを強く思うんです。あの、ちょっと個人的な話をして恐縮なんですけれども、僕、今年の入学式に初めての体験をした事があるんです。それはなにかというと、卒業式はなかったんですが、入学式は合同でやったんですね。人見記念講堂という大きなホールがあるんですけど、そこで入学式をやりました。ちょっと照明も暗くなっていました、そういう雰囲気もあったのかもしれないけど、僕はその壇上で国歌を歌った時に、思わず涙が出てくる、そんな体験をしたんですよ。どちらかという僕は国歌があまり好きじゃなかったんです。個人的なことを言うとね。というのは、小学校、中学校の時の思い出に何かあるかという、僕こんな声しているでしょ。太い声ですから、早い段階から声変わりしていて、「口だけでいいからね」なんて言われていたんです。それで歌おうにも歌えないし、その君が代は延ばすところもあって難しいじゃないですか。声はこうガラガラになっているし、そして歌おうと思ってもなかなか難しいし、それでなんとなくその練習というのはあまりいい雰囲気ではなかったから、申し訳ないけれどいい思い出がなかったんですね。しかし、いろいろところで国歌を聞いてよかったよかったということがあつただけでも、ただ、国歌を聞いて涙したというのは初めての体験だったんですね。それは4月の2日だったんですが、全国から新入生が来てくれているんですよ。東北の方からも来てくれているんですね。その1年生のみなさん方、礼服というか式服を着てみんな参加されているんですけれども、その姿を見ているだけでなんかこう心が高まる場所があつただけでも、壇上で国歌を歌った時に、国歌はどんなでしたかね、「君が代は、千代に八千代に

さざれ石の巖となりて、苔のむすまで」、とっさに出てこないというのもダメなんですけれどもね、つまりね、それはいったい何を意味するんだろうか、と歌いながら、結局この「君が代は」というのはいろいろ言われたりするけれども、結局そこに意味しているものは何かと言ったら、この平和な日本はということでしょう？この平和な日本は永遠に続いていきますよと。長く延ばしたりしなきゃいけない歌なんだけれども、それを歌いながらね、結局この歌は平和な日本が永遠に続いていきますよとということとをみんな確認しあっている、そんな歌なのかなと。そして、その新入生のみなさんが、高校を卒業してこれからいろいろな方向へ育っていくわけだけれども、その育つ方向としてうちの大学を選んでくれたんですよ。今、新入生のみなさんと一緒に、これからの日本をね、作っていけるんじゃないかなってね。その意味を思うとね、なんか壇上で熱いものが込み上げてきて、思わず涙ぐんでしまったという体験があるんです。まあそのあとね、1年生のみんなと会ったりして、あの時の感情はなんだつたのかなと思う時もあるんだけど、やっぱりそういう気持ちというのは大切に、これからの生き方というのを考えていきたいと思うんです。ほんとに、みなさん関西の方は、16年前阪神淡路大震災を体験されているわけですけど、そういったことの教訓も生かしながら考えていきたいと思うんです。ほんとうに、みなさん関西の方は、16年前阪神淡路大震災を体験されているわけですけど、そういったことの教訓も生かしながら考えていきたいと思うんです。

ちょっとレジュメを見ていただければと思うんですが、まずはじめに書いておきましたのが、「東日本大震災の悲しみを乗り越え新しい日本を創っていこう」と。「その根幹を担うのが道徳教育」なんですよということが言いたかったんです。それで、実は今回の大震災に際しまして、いろいろな報道がされているわけですけども、国際的に日本人々に対する称賛の声というのがいろいろところから起こっているわけです。今実は本を持ってきたんですけども、『世界が感嘆する日本人』という本なんです、これは税込みで700円くらいの本なんです、ぜひ読んで欲しいと思うんですが、別冊宝島編集部が編集しております、「宝島社新書」から出ているんですね。これには何が書いてあるかという、サブタイトル「海外メディアが報じた大震災後のニッポン」ということなんです。つまりね、外から見ているいろいろ言うんじゃないかって、実際にそこを取材してみ、被災されている人たちと会って、いろいろなお話を聞いたりする、そこで感じたことを報告しているんですよ。最近出た本なので、すぐに取り寄せられると思うんですけどね、これを読んでいるとね、もうほんとにね、「あ～日本人でよかったな」なんて思ったり……。僕そこでね、何が一番心強かったかという、いろいろ書いてあることがそれなりに心強くなることもあるんですけども、ちょっと前ね、「日本の常識は世界の非常識」なんて言われたじゃないですか。竹村健一さんなんかいろいろ言った

りしていたんですね。それで、日本の常識は世界の非常識なんて言われた時に、日本の常識というのは、基本的にその価値観とか道徳観というもを作るわけでしょ。僕は文部省、文部科学省で道徳教育を担当させていただいていながら、やっぱり日本の道徳教育はしっかりと頑張っていかなければならないと思うんだけど、一方で日本の常識は世界の非常識なんて言われると、やっぱり価値意識とかそういうことを考え直さなければならいかなんて思ったりするんですね。まあちょっと弱いですからね。いろいろな視点で考えないといけないということがありますから。ところが、この究極的な危機の状況において、日本国民が示してくれた生きる姿勢というのは、世界から絶賛されているわけですね。なにも、日本の常識が世界の非常識ではないですよ。日本の常識が世界の常識なんです。その常識を僕らはもっと発信していかなければならない。自信をもってね。だからそれがちょっと嬉しかったんです。

じゃあどういふ倫理観とか道徳観が言われているかという、例えば、自分よりもみんなのために、みんなで助け合って生きていこう、自分はいろいろわがまましたいとかなんか思うことはあるんだけど、しかしやっぱり秩序が大切だと、自らを律しながら秩序ある生活を守っていこうと。さらに、苦しいけれども頑張るよ、あきらめないでという精神、あるいはお互い様とか、あるいは仕方がないとか、そういう考え方も外国の人には魅力を感じるようですね。仕方がないという感覚とか、それとお互い様だよというゆとりをもった捉えかた、そしてそこからみんなで助け合って自分よりもみんなのためにという形で生きていこうとする。そういう価値観ですよ、あるいは倫理観ですね。それらが絶賛されている。これは、われわれが普通にやっていることじゃないですか。普通に感じていることですよ。それが、いわゆる危機の、切羽詰まった状況において発揮できる。普段こういうことをみんなで話し合っているだけじゃないんですよ、実際自分のものとして身につけているんですね、素晴らしいじゃないですか。こういった倫理観や道徳観といったものを世界に発信していく。自信をもってそういうことを行えるんだということをも身につけてくれる、まず子どもたちですよ。世界に発信してくれるのは子どもたちですから、その子どもたちにどういふふうにご教育していったらいいんだろうか。つまり、こういった、世界から絶賛されている日本国民の倫理観や道徳観というのをどこから身につけたんだろうか。どういった形でそういったものが培われてきたのかなということを考えてみると、僕は自然とともに生きる生き方がここに集約されるんじゃないかなと思います。BSを見ていましたら、地質学者を通していろいろ日本の自然について話しているのがあったんですけど、日本の素晴らしい自然というのは奇跡に近いと思うんですよ。この日本列島ができたのが 300 万年前-佐藤先生大丈夫でしたかね-そこから

まあいろいろ歴史が積み重なるんだけど、そのテレビではですね、日本のどこに行っても湧水があるじゃないですか、美味しい真水が。そして四季折々の変化がある。そして海の幸・山の幸をたっぷり味わうことができるわけですよ。美しいところだけじゃなくて、国全体において素晴らしい自然環境に恵まれているというのは、まさに日本が奇跡的な形でもっているんですよというんですよ。ああそうかと改めて自然をまた見直したんですけど、その自然が一方では大変大きな災害をもたらすわけですよ。一方では非常にわれわれに恩恵を与えてくれている、その自然が豹変する。しかしその自然に引きつけられるわけですよ、ある意味においてはね。その自然と向き合っていないとね、われわれは生きていけないわけですから、自然との対応の中で、いろいろな生き方を考えたり知恵を出し合ってきて、そして生まれてきたのが今のわれわれが持っている倫理観や道徳観ではないかな、と思うんですよ。つまり、レジュメに書いておきましたように、日本の土着文化や道徳観は自然とともに生きる生き方の中から育んできたんじゃないでしょうか。とするならば、もっと、この日本国民が大切にしてきた自然とともに生きる生き方というのを、もっと根本から考え直さなきゃいけないんじゃないかな。だって、どこでも、学校でも家庭でも地域でも、なんらかの形で自然を取り入れた生活というのをしていますよね。当然なんだけれども。僕らの世代なんかは、太陽とともに起きて草刈りに行ったりだとかしていますよね。そして夕日が沈む、それから家に帰る、そして何かちょっとして寝てしまう、そんな感じでした。自然の中で遊びながら自然にある物なんかをいろいろ食べたりする。まさにそれが旬のものだったじゃないですか。そして、昨日は満月でしたか？一昨日でしたか？十五夜の満月でしたよね。中秋の名月でしたね。それを見ながらお団子を食べたりするわけじゃないですか。それで、ススキをみたり、あるいはコウロギの音色を聞いたり……。今、中国から私の所に来てくれている留学生が 4 人おられるんですよ。その人たちと話しているとね、ある人はね、もうちょっと年配なだけだけどね、世界をいろいろまわっておられるんです。それで、お聞きしていると、「日本の自然は温かい」って言われるんです。例えば、月を見る。砂漠に行っても、自分の国でも月は見ていたと。それで、その月はそれぞれで感じが違いますよ。じゃあ日本はどんな感じ？っていうと温かい。日本の月を見ていると温かさを感じると、そんなことを言ってくれるんです。つまりそういう風土があるんじゃないかな。もっと自然とじっくり向き合っていくといろんなことを学んでいける。そしてまた、命の活力・生命力っていうんですかね、そういったものをしっかりと育んでいけると思うんですね。だからそういったことをもう一度しっかりと考え直す必要があるんじゃないかなと思います。これからの道徳教育、まず一つは、自然とともに生き

る生き方ということをもう一度根底から考え直そうじゃありませんか、というのが一つ、今回の大震災を被災しながら改めて確認したことでした。

これからの道徳教育にぜひ取り組んでいかなければならないと思う二つ目は、世界の人々との交流を深める生き方なんです。それはどういうことかという、今回の大震災に対して、世界 160 以上の国や地域から支援をいただいているじゃないですか。義援金あるいはメッセージなどをいただいているわけですよ。さあみなさん、160 ヶ国、あるいは地域、どれだけ知っていますかね。たぶん半分くらいかもしれませんよね。僕らも知らないところがたくさんありますよね。その中には、ほんとに日々の生活も苦しい、そういった中で一所懸命勉強している、あるいは一所懸命生きている、そういう子どもたちが義援金とか、あるいはメッセージとかを送ってくれるんですよ。どうしてでしょう。日本に目を向けているんですね。そして自分たちが苦しいけれども、自分たちよりもっと苦しい立場の子どもが日本にいる、つまり、家も全部流されているんですよ。そしてまた、お父さんお母さんが亡くなっている子どももいるわけですよ。私たちは貧しいけれども、住む家がある、そしてお父さんお母さんがおられる。そういう物も全部なくなっている、父母がおられない、そういう子どもたちがたくさん日本にはいる。その子どもたちに、自分たちはメッセージを送っていかないといけない、という形で苦しい生活の中から義援金とかメッセージを作って送ってくれるわけですよ。私たちは、そういう人たちに支えられて嬉しいですよ。じゃあ、その後何をしなくちゃいけないんですか？恩返しをしなくちゃいけないじゃないですか。みんなからこれだけ支えてもらっている、恩をいただいているわけですよ。だったら返さなくちゃいけない。さあ、そのことに関わって、今の学校、みなさんの母校も振り返ってもらったらいいと思いますけど、どうですかね？国際理解教育。しっかりやってきましたかね？まあ、研究していこうとか、あるいは特定の学校と姉妹提携をもっているとかいうことであれば、かなり国際理解をやっているかもしれませんが。ただ、その国際理解をやっているという学校でも、せいぜい 5 ヶ国か 6 ヶ国くらいかもしれませんよね。我々は 160 ヶ国のあるいは地域とこれからいろいろ交流していかなければいけないですよ、大丈夫でしょうかね。僕は日本の学校というのは素晴らしいと思います。いろいろな学校にお伺いしましたが、しっかり頑張っておられるんですよ。ところが、じゃあ今の日本の学校で何が一番足りないですかと聞かれたら、僕は真っ先に国際理解教育、国際感覚を身につける教育というのがやっぱり弱い。これは、しかたのないところもありますよね。だって、日本の学校へ行って、外国籍の子供はどれだけいるかと言ったら、何人かいるというのは例外ですよ。そこはやっぱり知らず知らずのうちに、外国も特定の、授業でも扱う国

ぐらいいは知識理解も深めて、関心を持つかもしれないけれども、それ以外の国に対しては日常生活を行う上ではあまり関心を持たないかもしれませんよね。だから、意識的にやっついていかないといけないですよ。国際理解教育とかそういうことをね。ところが、どうもそれが弱い。僕はいつも、簡単にできることをやりましょうよって言っているんです。それはなにかというと、世界地図。みなさんの学校で世界地図を廊下に貼っていませんか？貼っているところもあるでしょうけど、例えば、小学校ですと 6 年生の教室に貼ってあるかもしれませんね。中学校も世界史とかを習う 2 年生くらいになるんでしょうか。そういうところには貼っているかもしれませんよね。そうじゃなくって、もっと生活の場面で世界に関心を持とうと思ったら、廊下に大きな世界地図を貼っておく必要があるんじゃないでしょうか。例えば、そこに貼っておくだけではダメですよ。情報を発信していかないと見てくれませんか。だからそこに、1 週間に 1 回じゃ大変だから、2 週間に 1 回くらい、みんなに関心を持って欲しいなという記事を矢印で「ここここですよ」という形で情報を提供していく。そういうことを先生がやるというのは大変ですから、先生がリードしながら、例えば小学校であれば 6 年生の、各クラスとうまく連携しながら取り組んでいく。あるいは、クラブ活動なんかで、国際クラブなんかを作って取り組んでいくとかいろいろできると思うんですよ。そういうことをすることによって、いろんな国に興味を持つことができる。だから、もっとそういうことをしっかりやっついていかなくちゃいけないんじゃないだろうか。例えば、そういう学校に行った時にみんなどうかが気になる？例えば、外国の人が来てくれた時にそういう日本の学校があって、「日本の学校というのは、世界のことにもしっかりと目を向けて教育してくれているんだな」という形でみんな安心すると思うんですよ。僕がアメリカの学校に行った時に、そこには、いろんな事情があるかもしれないんだけど、世界の地図、あるいは今話題になっているところの地図とかが貼ってあったりするんです。そしてまた、「今月はアジア月間ですよ」というような形でアジアの文化を紹介したりとか、そういうことをやっているんですよ。そうすると、やっぱりアメリカは、覇権主義とかいろいろ問題はありますが、世界に目を向けて教育をやってくれているんだな、とちょっと安心するわけじゃないですかね。そういう国づくりをやっついていかなければならない。その最先端にいるのが学校の先生なんですよ。つまり、絶好の機会じゃないかと、阪神淡路大震災もね。だからこれを機に世界に目を向けていける子どもたちを育てていく。それを日常的な生活の中で、しっかりと意識のできるように。そして、単にそれを意識するだけでなく、そこに困っている子どもたちがいる、そういったことがマスコミに出ている。そうしたら、メッセージを送ってみようかとか、現金をみんなで集めて送って

みようと、そうやって動き出す子どもたちをぜひ育てていただきたいと思うんです。それが二つ目ですね。

そのことに関わってなんですけれど、実はもう一つ、世界の国から日本にメッセージを送ってもらっているけれども、ちょっと見方を変えてみると、日本国民が、今世界のあちこちで活躍しているということも一方ではあるよね。嬉しいことですよ。特にそこで、僕らが目を向けるのは若者たち。ちょうどみなさんくらいの若者・・・石川遼君はみなさんと同じくらい？下くらいかな。他には、浅田真央さんとか、岡崎君とか内田君とかサッカーで世界で活躍してくれているみなさんが、ちょうど20歳から25歳前後で頑張ってくれている人たちがいる。そして彼らは、世界に目を向けながら、自分の生き方を考えているんですよ。そして、日本のことにもしっかりと目を向けながら、今回の大震災に対してしっかりとメッセージを送ってくれる。メッセージを送ってくれるだけではなくて、自分たちができることは何かということで実際に行動もしてくれているわけですよ。みなさんの世代ですよ。ところで今、ゆとり教育批判というのが起こっているじゃないですか。それで、みなさんは、そのゆとり世代なんですよ。ゆとり世代がダメだダメだと言われている。この10年、経済界なんかでは空白の10年と言うわけじゃないですか。みなさんも、今までいろいろやってきたけれども僕なんかも、みんながしっかり育つようにという形で取り組んできた、それが無駄だったのということになるわけですよ。確かに、ゆとりがゆるみになってはいけません。学力低下がおこってきた、これはやっぱりしっかりと対応していかないとはいけません。当然なんだけれども。ただ、学力を、学力を、と絞っていったらそれでいいの？今まで学力の低下的な現象が出てきたから教育がダメだったの、と短絡的に言われるとしたら、われわれの存在意欲はなくなっちゃうわけじゃないですか。ところが、石川遼君とか、20歳から25歳前後で活躍している子たちというのは、ゆとり世代の申し子じゃありませんか。確かにそうなんですよ。学校週5日制が平成10年から始まりましたよね。その前の平成元年、あるいはその前からゆとりの充実ということで取り組んできたわけじゃありませんか。学校週5日制なんか特に分かりやすいですね。つまり、学校週5日制というのは、学校で勉強するのが5日間なんですよ。そしたら当然、土曜日に行われていた4時間というのが少なくなるわけですよ。学校で勉強する時間が。それに、総合的な学習の時間というのを3時間から4時間取ろうじゃないかということになっているわけですから、それも新しく作るので当然、7時間から8時間くらいは、それ以前のカリキュラムから、少なくなっちゃうわけですよ。今まで通りの学習内容を新幹線の教育の形で教えるとしたらばどンドンどンドン落ちこぼれるな子をつくっていくんじゃないかということでした。だから教える内容を少なくしてゆとりをもって学

べるようにしていきましょと、こういうような形で改革が行われたんですね。ただ、学校での学びはそうなんだけれども、実は、みんなの生活習慣はどうですか？1週間は7日ですよ。だから土曜日と日曜日は、その学習を5日間の学校での学びとうまく関わらせて自分の生き方をしっかり考えていけるようなそんな教育にしていこうじゃありませんか。それが生きる力を育てようということなんですよ。だから今、世界で活躍してくれている彼らは、学校だけの教育じゃなく、土曜日や日曜日、いろいろなところで学んだりする。でも、学校を抜きにして土曜日や日曜日だけの学習でやっているかということそうじゃなく、その学習と5日間の学校での学習をうまく関わらせながら自分の生き方を考えているんですよ。だから、単に大学に行くだけが目的じゃないんですよ。彼らの多くは高校から世界へと発信していく。あるいは、クラブへとかね。あるいは自分の専門的な方向へと向かっていくわけですよ。でもその学習は、中学校や高等学校でやっているんですよ。それは、やっぱり先生にそういうことでアドバイスをいただいたりしながら、やっぱり世界で活躍するためには外国を知らなきゃいけないね。だとしたら、もっと英語をしっかりとやる。英語だけでなくもう一つくらいやっておいたらどうっていうような形で、自分で先生方のアドバイスをいただきながら開拓して行って卒業した時にそういう形で世界に向かっていけるわけですよ。そういう生き方、もっと言えば、学力低下だけが注目されているけれども、生きる力をしっかりと育てるゆとりの充実という理念を自分のものにして成長してくれている、そういう生き方をしている若者たちがいるよ、そこになぜ目を向けないの？今回そういう意味では、非常にいい機会なんじゃないかなと思うんです。何が言いたいかと言うと、ゆとり世代のみなさんね、自信を持って生きてくださいよ。そしてまた、自分の生き方というものを堂々と子どもたちに語って下さいよ。もちろん今言ったみたいに、ゆとりがゆるみになってはいけません。でもね、ゆとりがないと人のことを考えられないんですよ。そうでしょ？そしてまた、自分を振り返ることもできないんですよ。結局個人主義になっちゃうんですよ。ますます個人主義になっちゃう。そして、勉強というのは、基本的に個人でやるような形になってしまいますと、どンドンどんみんなと関わることがなくなっていきます。そして、みなさんも思われたかもしれないけれど、とにかく大学に行かなければ始まらないよ、と思うことはなかったですか？今の子どもたちもそう思うかもしれない。しかし、大学に行ったらいろいろなことをやりますよ、もっとゆとりをもっていろいろなことをやりますよって言ったって、それは不可能ですよ。やっぱり、小学校、中学校、高等学校、そこでいろいろな視点視点を拾いながら、自分の生活、自分の生き方、日々の学習、こういったことを考えられるようになっていかなきゃいけないんですよ。そう

ということが積み重なって、大学でもゆとりを持った広い視野からの自分の生き方を考えられるそういう学びができるようになってくるんじゃないでしょうか。そういうことをもう一度ここで確認していただきたいなというふうに今思うんです。ちょっとそういうところをお話しましてね、もう少し今度は、理に反するところについてお話をしていきたいと思います。

これからの道徳教育ということで、東日本大震災、これをきっかけとしながら今言ったような、自然とともに生きる生き方、世界の人と交流を深める生き方、そういったこととゆとりと充実ということを大切にしながら追い求めていこう、そういう道徳教育をしっかりとやっていこうというのが一つでした。それで、もう一つしっかりと押さえないといけないのは、やっぱり教育の根本法である教育基本法、この理念というのをしっかりと押さえた教育を行っていかなくちゃいけない。みんな教育公務員になるわけですから。その教育基本法はご案内のとおり、平成18年の12月に、改訂されました。59年ぶりということでしたよね。ということで考えるならば、あと少なくとも50年はこの改正教育基本法が、学校教育現場の、あるいは、教育全体をしっかりと方向づけていく、こう考えたらいいと思います。じゃあその改正教育基本法で何が強調されているのか、それが道徳教育とどう関わるのかということを押さえておきたいんですよね。それが二番目の話なんです。

そこで四点あげておきました。実は三つと言ってもいいんですね。一つは何かと言うと、人格の形成・錬磨ということを強調している。それはどういうことかと言いますと、教育原理の授業を思い出して欲しいんですけど、教育基本法の第1条に教育の目的が書かれています。これは、旧も新も同じなんです。その第1条がどう書いてあるかと言うと、教育は人格の完成を目指し云々云々と続いているんですね。ただ教育の目的が何かと言ったら、人格の完成を目指すことなんです。これはみなさんいろいろと習ってきたと思うんです。では、今回の改正教育基本法ではどう書いてあるかと言うと、全く同じで、第1条「教育の目的」においては「教育は人格の完成を目指し」と書いてあるんですね。そこだけだったら、別に強調されているとは言えないんですけども、実は、人格という言葉が改正教育基本法ではあと2箇所できます。どこかと言うと、第3条。これは新しく加わった条項なんですけれども、生涯学習の理念が書かれているんですけども、ここにある通り生涯学習というのは、一生涯学び続けられるそういう教育システムを創っていきましょう、あるいはそういう社会にしていきたいと思いますという提案なんです。では、何をめざして一生学べるようなそういう教育システムを創ろうと提案しているのかと言うと、はっきりと書いてあるんです。国民一人一人が、自己の人格を磨き、(そのことを通して)豊かな人生を送ることができるよう、つまり、人格を

磨くということは、一生ものなんですよ。一生かかって人格を磨いていく。実はそのことは、基本的な豊かな人生、生きがいがある人生、幸せな人生を送ることに繋がっていくんですよ。だからそういう学びが将来続けられるような、そういう教育システムを創っていきましょう、そういう社会にしていきたいと思います、という提案なんです。さあ、3箇所目はどこに出てくるかと言うと、第11条なんです。第11条は幼児期の教育なんです。これも新しく加えられた条項なんですけれども。この改正教育基本法で幼児期の教育というのは、教育の初め、出発点なんです。小学校へ入学するまでの幼児期。生まれてから幼児期の間で何がポイントでしょう、ということも書いてあるんですけど、そこに、こういうようなことが明記されているんです。幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培うために重要なのである、と。まさに、幼児期はいろんなことをしなくちゃいけない。でも、一番重要なのは何かと言うと、生涯にわたる人格形成の基礎を培うことですよと書いてあるんですよね。つまり、どういうことかと言うと、人格形成は一生涯を通して追い求める事なんです。つまり、幼児期においてその基礎作りをしっかりとやっていきましょう。その上に、小学校教育があり、中学校教育があり、高等学校教育があり、大学教育があり、あるいは社会での学びがあり、云々云々、一生かかって人格をしっかりと磨いていく。そのことを通して豊かな人生、幸せな人生が送っていただけるように、そういう教育システム、あるいはそういう社会を創っていきましょう、と。しっかりと強調されているわけですよ。じゃあ人格というものはどう捉えたらいいのか、そこが課題ですよ。じゃあ人格というものをどんな風に考えたらいいの、的な課題が次にできます。

それが第2条「教育の目標」に書かれているんです。つまり、人格を育てる、その教育において何がポイントですか、と問われた時にそのポイントが五つありますよというのが、教育の目標なんです。そこには、五つのことが書かれているんですね。これは、法律用語では号と呼ぶんです。これは、1号、2号、3号、4号、5号というんですね。まず1号はね、どう書いてあるか。幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな体を養うこと。何が書いてあるんでしょうかね。何のこともない、知・徳・体にわたってしっかりと養って行きましょう。知・徳・体にわたってしっかりと培っていくこと、養っていくことが必要なんです。これがおさえられた訳なんです。ああそうかそうか、教育とは何かで我々はいろいろみんな考えてきたことと、人格を育てるということと大差はないんだなということが理解できます。じゃあ2号から5号まで一体何が書いてあるのかということですよ。そこで、ちょっと見て欲しいんですけども、共通する言葉がありませんか。2から5まで。ぐーっと読んでみまして共通する言葉あり

ます？なんかいろいろ書いてありますよね。さあ、ちょっとその語尾を見てください。なににをなににする態度を養うこと。2号も3号も4号も5号もなににの態度を養うことと書いてあるじゃないですか。ということは、2号から5号までは、ひとつのくりとしてなににの態度を養う、じゃあその態度としてはどんな態度ですかというのを四つに分類しているというか、分けている、こう捉えられますよね。だからこれは、ひとつのくりにして捉えることが適切だというふうに考えられるんじゃないですかね。じゃあその態度ということなんだけれども、態度とは何かといったらそれは、姿勢ですよ。心構えですよ。ここに書いてある内容を見ますと、これは全部道徳的価値意識なんですよ。つまり、我々が人間として生きていく上において心がけなければいけない心構え、あるいは姿勢がここに書かれてありますよ。それは結局、道徳的諸価値、つまり人間として生きていく上で大切な価値がしっかりとここにおさえられている、というふうに捉えられます。実はここに書かれていることと、道徳の指導内容、学習指導要領の第3章道徳の第2、内容。そこにいろいろ書いてあるじゃないですか、指導する内容がね。それ四つの視点で分けられてありましたよね。自分自身に関すること、他の人に関すること、自然や崇高なものとの関わりに関すること、集団や社会との関わりに関すること、この四つでしたよね。それとこの第2条の2, 3, 4, 5号を比べていただきたいんです。そうするとこの第2条の2号に書かれていることと、道徳の指導内容の1の視点、主として自分自身に関わることに書かれていることと、よく似たことが出てきています。全く符合しているわけではありませんけどね。第2条の第3号に書いてあることは、道徳の内容項目の2の視点、人間関係のところね。そこに書かれてあることと多くは符合します。4号に書かれてあることは、道徳の内容項目の3の視点ですよ。自然や崇高なものとの関わり。それとリンクしていますよね。そして5号に書いてあることは、道徳の指導の4の視点と重なってきます。まさにこれは、基本的な道徳的価値意識的なものがおさえられている。言葉を換えれば道徳性というようなことにおさえることができますよ。これらを元にしながら一人ひとりが道徳性を育てていくわけですよ。その元になるものがここにこう書かれているのではないかというおさえができるように思います。となると、結局、人格というのは、知・徳・体をしっかりと育てていくことによって形成されていくんですよ、それと同時に、その基盤としてその土台として人間としてどう生きるかに関わる道徳性をしっかりと育んでいかないとはいけませんよ、つまり、徳に関わる部分ですよ。その部分がベースになって、知識的な側面、知性に関する側面、そして体力・健康に関する側面がしっかりと重なり合うことによって人格が形成されるんですよというところが、日本の教育の根本を示す教育基本法において、明

確に示されている、と捉えることができます。そして、さらにこれからの教育は学校・家庭・地域と連携した教育ということを強調しています。第10条には、家庭教育について明記されます。これは、新しくつけ加えられた条項なんですけれども、そこで、子どもの教育に対しては、国民全員が、大人全員が責任を持たなければならないんですよ。でも、その中で一番責任を負わなければいけないのが親なんです、保護者なんですよということが明確に示されました。そして第13条は学校・家庭・及び地域住民との相互の連携協力によってこれからの教育は進められるんですよということが明記されています。つまり、長い教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに相互の連携および協力に努めるものとする。これからの教育においては家庭教育をしっかりと行っていく必要がありますよ、そして、学校・家庭・地域が連携した教育を推進していく必要がありますよ、ということが提起されます。じゃあその時に何をベースにして連携を図っていくんですか、何をベースにして家庭教育の充実を図っていくんですかと言ったら、知的な部分でしょうかね？体力的な部分でしょうかね？もちろんそれも関わるわけですけども、一番はやっぱり心に関すること。健全な育成に関することですよ。だからまさに、学校が地域と連携していかなければならない、家庭における教育をしっかりとやっていかなければならないということは、心の教育、道徳というのをしっかりと取り組んでいきたいと思いますよ、ということの表れでもあるということです。そういうのをしっかりとおさえていただきたい。もうひとつ最後におさえておいていただきたいのが、学校の役割、というのをどのように書いているかと第5条と第6条のところなんですよ。その第5条は義務教育について書かれています。義務教育というのは、現在のところは小学校・中学校ということですね、将来的にはどうなるか分かりませんが。第6条の学校教育というのは、まさに幼稚園から大学院とさまざまな段階の学校全部が含まれるんですけども、みなさんはこれを一緒にして考えていただきたいと思います。そこにどうことが書いてあるかということ、まず、第5条義務教育では、各個人の有する能力を伸ばしつつ、社会において自律的に生きる基礎を培うんだという、これが義務教育の役割だと書いてあるんですよ。つまりどういうことかということ、義務教育において、個性を伸ばすことが大切だと。これはずっと強調されてきましたよね。これは大切なんだけれども、そこでもう一つつけ加えているんですよ。それは、社会において自律的に生きるということです。つまり、自分がしっかりと自分の目標を持って自分の能力を伸ばしていくというのは、まさに自己達成感、自己成就感的なものが、しっかりと味わえるようになるわけですけども。もうひとつそこで社会的自立ということが加わってくると、自己有用感、つまり、私は社会で役立っているな、私はいろいろ

ろやることでみんなから喜んでもらっているなというよう
なね、そういう充実感のことが味わえる時に、社会的に
自立している。自分の個性が単に自分の好き勝手に自分の
好きなところを伸ばしているだけじゃなくってそのことが
みんな喜んでくれる。あるいは、自分もそのみんなになん
かいろいろなことをできるという充実感を味わえるという
ことであるならば、まさにそれは、社会との関わりで自分
の生き方、自分の個性の伸張ということを考えていくこと
になるわけですね。だから、そういう個性の伸張と社会的
自立というのを一体化した教育をやっていかなければなり
ません。そういう力を伸ばすための基礎教育ということ
を、義務教育の段階でしっかりとやっていきたいと思います
ということです。第6条、学校教育においてはということが
書いてあるかという、「教育を受ける者が」、誰でしょう？
子どもたちですね、子どもたちが、学生・生徒、学生も
ですけどね、「学校生活を営む上で必要な規律を重んずると
ともに、自ら進んで学習に取り組む意欲を高めることを従
事して行わなければならない」と書いてあります。ここで
二つのことが書いてありますよね。一つは「規律を重んず
る態度をしっかりと養っていくこと」、そしてもう一つは
「学習意欲をしっかりと高めていくこと」この二つですよ
ね。さあその規律を重んずるとは、規範意識をしっかりと
守れるようにしましょうというようなこととも関わって
くるんですね。そういう規律の精神、規範意識というもの
をしっかりと育むこと、学校教育において取り組みましょ
う。そして学習意欲を高めることもしっかりと取り組まな
ければいけませんよと、その二つがしっかりとおさえら
れているんですね。これをどう解釈すればいいかということ
なんですけれども、まあその前段の方ですね。規律の精神、
規範意識ということに関わって、どういう言葉が修飾して
いるかという、「学校生活を営む上で必要な」と書いてあ
ります。これはどういうことかという、結局規範意識とか
規律の精神というのは、どういう時に必要とするかとい
うことですね。集団生活をする時でしょ？だからここで
言っているのはなにかという、規律を重んじましょ
うとか、あるいは、規範意識をしっかりと身に付けましょ
うじゃなくって、実は、それが必要な状況をしっかりと
創っていく必要があるんじゃないですか、つまり、望ま
しい集団活動ですよ。学校生活であるのは、子どもたち
の生活でいうならば、学級生活ですよ。その学級生活を
子どもたちが先生と一緒に創っていく。そして、いい学
級にしていこう、みんなが充実感を味わえる気持ちの
いい学級にしていこうと思ったら、そこには当然約束事
が必要になるわけじゃないですか。そしてその約束事
をみんなで守っていくようにしていかなければいけ
ない。それを守るためには自分を律することが必要とな
ってくるんじゃないですか。そういうことで、つまりま
さに社会的自立に関わることですよ。

社会でみんなと一緒にいろいろなものをつくり上げて
いく、いろいろなものを創っていく、その時に約束事・規
範意識・規律の精神などが、大切なこととなります。そ
ういう形で規律の精神、規範意識を養っていくのが大切
なんです。その望ましい集団活動を学校生活で子どもたち
が創っていく。大学でも同じじゃありませんか。みんな
もこういう形で大学院みんなこういう講座をつくり上げ
ていく、そのことにおいて約束事を創っていかないと
いけませんよね。さらに、約束事だけじゃなくって、それ
を守るために規律、自分を律していかなければなら
ないことがでてくるわけじゃありませんか。それに後半
の「自ら進んで学習に取り組む意欲を高めましょ
う」というのはどうということかという、要するに学
習活動において、学習意欲を高めることが大切なん
だけども、ここでいう学習意欲、どういう風に捉え
たらいいのでしょうか。当面の課題で、ある計算問題、
その計算が確実にできるようになるために、そして
また、今度のテストで100点が取れるように、そ
ういうことを目標にして勉強する。これも学習意
欲を高めることになると思うんですけども、そ
ういうことを言っているのかという、実は先ほどの
生涯学習の理念と関わるわけですね。つまり、これ
からの学校教育、今までもそうなんですけれども、
結局、学校教育がベースになって一生涯学び
続ける子どもたちを育てていく、これは目的
じゃありませんか。ということは、学習意欲も
学校だけで持つじゃなくって学校を卒業して
からもまた持ち続けられる学習意欲、これが
必要でしょ？じゃあそれはなんで
ですか？と聞かれたら、一生追い求めて行く
のが人格、ですよ。その人格を磨いていく
わけだから。だから、人格を育てるという
ことに関わって日々の学習活動と捉えら
れる。あるいは日々の生活も捉えられる。
そうすることによって、その学習意欲、
しっかりと勉強することをとおして人間
としてよりよく生きる、あるいは、自分
の目標を達成していく、一生かかって
磨いていかなければならない人格を
より一層磨いていくことができる、
より人間を鍛えていくことができる、
よりいい私を創っていくことができる、
そういうところに繋がる意欲を育て
なくちゃいけないですよ、ということ
を言っているというようにとらえら
れると思うんですよ。知識理解じゃ
なくて意欲を言っている。その意欲
を一生追い求めていかなければい
けない。じゃあそれはなんなの？
ということなんです。

ちょっと、きりのいい時でしょうか。

○司会

途中で申し訳ありませんが、今から10分間くらい休憩を
して後半に入りたいと思います。

<休憩>

○司会

それでは、後半に入りますが、質疑応答の時間も取って
ありますので、どしどし質問を準備しておいてください。

学生さんがですよ。では、よろしくお願ひします。

○押谷由夫

はい。ごめんなさい。じゃあ続きを話したいと思います。ちょっと今、小難しいことをお話しましたが、もうちょっと今述べたところを簡潔にまとめられないかな、ということを書き留めておきました。つまり、今教育基本法のところでお話してきたところ、それは教育の本来的なあり方というところを言っているんですけども、それが実は道徳教育そのものでもある、そういう捉え方もできると思うんです。そこで、ちょっと視点を変えて、学校における道徳教育をどうまとめられるかといったときに、一応私はこういうまとめをしています。生き方の自立を柱に生活の自立、学習の自立を図ることです。つまり、教育というのは、あるいは学校というのは、子どもたち一人ひとりの自立を援助するわけですよ。この自立は先ほど言いましたように、社会的自立などいろいろありますけれども、その自立をどうやってサポートしていくかと言った時に、どの学校でも二つのことをしっかりと取り組んでいると思うんです。一つは生活の自立ですよ。基本的な生活習慣に関わって、しっかりと生活指導という形で、あるいは生徒指導という形で指導するじゃないですか。だから、必ず学校には、生徒指導部・生活指導部というのがありますよね。大学で言ったら学生部かな。もうひとつは学習の自立。学習指導に関わってしっかりと組織をもって取り組んでいる。つまり、基礎学力をしっかりと身につけられるようにということで、学校の組織でいうならば教務部になるんじゃないかな。学習指導部的な形で取り組まれます。どの学校においても生活指導に関わって、あるいは生徒指導に関わって生徒指導主任、そして学習指導に関わっては教務主任というのがおられて、それは手当が出るんですね。それなりの責任をもたれて組織的にもしっかりと取り組まれているんですけども、ただ、うまくいっているところとそうでないところがある。どの学校でも生活の自立に関わる指導、基本的な生活習慣を身につける指導をしっかりとやられているんですよ。そして、学習指導、日々の授業にしっかりと取り組まれているんですけども、子どもたちの姿を見た時に、「あれ、この子大丈夫かな」と思うところとか「うわすごいな」と思うところとかあるわけじゃないですか。どこが違うんでしょう。なんか、下手をすると、先生が一所懸命になって取り組んでいると子どもたちは受身的になってくる、言われたことしかしない、言われたらする、とかこういうことになってくる。それは自立じゃないですよ。要するに、先生が一所懸命になることは大切なんだけど、一所懸命になって徹に入り細をうがって指導すればするほど子どもたちは受身的になっていく。そして、自分たち一人で行うときはなんか好き勝手なことをやっちゃうとかね。これでは、一人ひとりの自立を目指した教育をやっているとは言えないですよ。じゃあうまくいっている

ところとどこが違うんだらうかという、先にあげた生き方の自立ですよ。つまり、人間として自分らしくどう生きるかという部分をしっかりとおさえて、なぜこういう勉強をしなくちゃいけないのか、なぜこういった生活習慣をしっかりと律していかないといけないかという理由づけですよ。その理由づけが自分を高めていく。本当に関わってしっかりと意識できれば子どもたちは、先生から言われたことを受身で聞くのに慣れるんじゃないかって、自分を成長させていくために先生が一所懸命サポートしてくれているんだという形で捉えて、生活の自立の二つ目、生活を楽しむとか、あるいは学習を楽しむということがおこってくるんじゃないでしょうか。さらに、自分たちで生活を作っていく、よりいいものにね、あるいは、自分たちで学習活動をもっと創造していく、もっとこんな勉強もできないかなとかね。そういう形でどんどんどんどん発展させていけるようになるんじゃないかな。正直いいですよ、道徳教育をしっかりとやっている学校というのは、学力が実は高いんです。そして、体力も、スポーツをするとそういった運動の成績もどんどん上がっているんです。不登校も実は極端に少ないんです。データの的にもあるんですけどあまりそういうことをいうと、学力を上げるために道徳をやっているのかとか、生徒指導のために道徳をやっているのかなんて言われるといけませんので・・・。それらを含めて、人間としてよりよく生きる力を育てるのが道徳教育ですので、結果的にそれをやっていると、生き方の自立を柱としながら、生活の自立、学習の自立、大切なことでしょ、それに関わっているから結局子どもたちは自立心が生まれてくる。そして自分を高めていこうとそういう視点から目的意識をしっかりと持って学習や日々の生活に取り組んでくれるということになります。さっき言ったことをもう一度そういう形で整理していくとなると、学校教育において道徳教育は柱としてしっかりと位置づけていかないといけないということにあらためて気付かれるんじゃないかと思われるんです。さあそれをどうやって学校現場において具体化していくかということこれが大きな課題になるわけですよ。みなさま方ははじめですから、先生になっていい道徳の授業なり、道徳をベースにした学級経営ができると思いますが、いろいろな方法・技術を学びたいなと思っておられると思うんです。それは大切なことなんですけれども、実は道徳教育というのは、心の教育ですよ。心の教育というのは、心と心が通い合わないといけないじゃないですか、基本的にはね。ということは、やっぱり、先生自身がどんな心構えで生きているか、もっと言ったら、先生の後ろ姿が道徳教育にとったら一番大切だということになるんじゃないですかね。ちょっとその部分の話をしてみたいんです。資料をご覧ください。「あなたは、いま幸せですか」。なんか唐突な質問なんですけれども、これがちょっと道徳教育に関わるわけです。ちょっと最初読んでみます。「思いやり

のあるたくましい子に育ててほしい。みんなの願いです。その素朴な願いをかなえるのが、道德教育です。しかし、うまくいかない。どこに原因があるのでしょうか。社会が変わった。」確かにそうなんですよね。昔だったら、社会生活を行う上で道德精神は身についたかもしれない。でもそういう社会じゃなくなってきましたもんね。それに合わせて子どもたちも変わっていますよ。だから道德教育がうまくいかない、そう言いたくなりますよね。確かにそういう、社会が変わり、子どもたちが変わっているんです。だからうまくいかないという面もあるんだけど、でも私は、それは逃げでしかないんじゃないですか、と思います。道德教育で最も大切なのは何かと言うと、大人の感化力ですよ。つまり、子どもたちの姿というのは、大人の姿を反映しているわけですよ、基本的に言えばね。自分の道德性がどういう風に身についてきたかなと考えれば、やっぱり大人の感化力に影響されているわけですよ。言い換えれば、あなた自身の後ろ姿が、子どもたちの道德教育に最も影響を与えるのですよ。つまり、子どもへの道德教育ということは同時に自分自身の後ろ姿をしっかりと考え直してみる。自分自身の生き方を自らに問いかける。こういうことをしっかりやらなくちゃいけませんよ、というようなことがここでは言いたかったんですけれども。それではちょっと抽象的すぎますので、もうちょっと具体的なことで問いかけていきたいんです。「あなたは、いま幸せですか」。ちょっとこういう改まってではなくて、例えば、みんなが先生になり、自分のクラスの子どもたちから「先生今幸せ？」と問われた。みんなだったらどう答える？みなさんはまじめですからね、この中で心を痛めている子もいるだろう、だからあんまり幸せって言えないのかなあって形で「う～ん」と口ごもったとします。あるいは、自分もいろいろ不幸なことがあった、そういうことを考えると「はい」ってなかなか言えないんだなあ、っていうのが正直な気持ちかもしれませんよね。それは分かるんですけれども、さあ、今度は子どもの立場になって考えてみましょう。「先生今幸せ？」って問いかけているその子どもの意図は何かというと、先生、今私たちと一緒にいるこの場を先生はどう思っているのという問いかけだと思えますよ。つまり、「先生今幸せ？」って問われるのは、この場にいる、私たちと一緒にいるこの場をどう思っているの？という問いかけなんです。考えられるじゃないですか。この時に、間髪いれずに「うん幸せだよ。だって君といるのなんて幸せだよ」なんて言われたらもうウキウキしますよね。先生と一緒にね、今日のこの時間楽しみたいな。そして、先生が幸せな生き方するのに僕ちょっと役立っているのかなあなんて嬉しくなるじゃないですか。それで僕自身も幸せに生きたいから先生と一緒に幸せな時間にしよう頑張ろうとします。ところが、「う～んどうかなあ」なんて、先生正直だから正直にいうと、そういう姿に接すると子どもたち

は、先生私たちといるよりも違ったところに自分の素敵な時間を持ってられるのかなあなんて、そう思ってしまうと、先生は早くこの場を出たいと思っているのかなってそういう感覚になってしまうじゃないですか。例えばみなさんも「早く終わらないかな」なんて思っておられると、僕もそれに見合うようになってしまふかな。でもね、この場を楽しみたい。みんなと一緒に話したい、僕はそんな気持ちを持っている。みなさんもそんな気持ちで対面してくれていたら、そこで初めてこの場が楽しく有意義なものになっていきませんか。そうあることを望んでいるんですけれども、きっと同じじゃないですかね。ところが、じゃあそんなことを言うけれども、幸せなことに理由があるじゃないですか。どうしたらじゃあ幸せに生きられるんですかと問いかけられたら、その時に答えるんです。それを考え、追い求めるのが道德教育なんです。つまり、道德教育は精神的な豊かさを求めるんです。どれだけ困難な状況にあっても、心の持ちようで幸せになれます。どんな心の持ちようをすれば、子どもたちから「先生今幸せ？」と聞かれた時に間髪入れずに「幸せだよ」と言えるか、それを考えてみましょう。それがあなた自身の生き方を考えることでもあるんですよ。それがあなた自身における道德教育でもあるんですよ。「あなたは、いま幸せですか」と問われて、「いいえ、幸せでない」あるいは「う～ん、どうかな」と口ごもってしまったと仮定してください。その時の心の内、ちょっと探ってみましょう。先生の場合を考えたときね。そうすると「う～ん、うまく教えられない」、あるいは、「子どもが言うことを聞いてくれない」、あるいは「自信がない」とか「準備をする時間がなかった」とかです。つまり、ないないづくし、自分の足りない所ばかりに目が向いている。実はそれはいつまでもなくなりませんからね、ないないづくしの所にばかり目を向けていると結局泥沼に入ってくばかりです。だとしたら、ちょっと発想を変えたらどうでしょう。自分の中にある良さに目を向けてみましょう。その良さを見るのは、なかなかすぐに浮かばないかもしれない。自分の良くないところといったらスラスラスラーとでてくるのかもしれませんがね。これは子どもの特徴でもあるんですね。我々の特徴でもあると思うんですけれども。しかし、試しに、自分の得意なところ、がんばっているところ、みんなから認められているところなどを思いつくまに書き出してみてください。たぶん書けるんですよ。そうすると、なんとなく心が落ち着いてくるんです。だって、自分の中にあるものでも。みんなから認められていることを確認して書いていくわけですから、僕の言葉でいうと、心に貯金ができるんですね。心に貯金ができれば豊かな気持ちになって落ち着くわけじゃないですか。実は、その時にそのメモを見ながらその大元になっているのは何なのかということを考えてみます。結局それらは、より良く生きることに関わっていることに

気づくはずなんです。つまり、命を大切にするとか、最後までやりぬくとか、人が喜ぶことをするとか、責任を果たすとか、そういうことに関わって、結局自分がみんなから認められている、自分らしいことだと思ってやっていることが、突き詰めていくと価値意識につきあたるんですよ。つまりそれは何かといったら、あなた自身の道徳、価値意識をしっかりとここで育てている、そういうふうに捉えることもできるんですよ。そこをおさえながら、そのいいところを確認しながら、心が落ち着いてくると、さっき言いましたように、心にゆとりが出てきますよね。人間でおかしなもので、ゆとりが出てくると自分を見つめることができるんですよ。あるいは相手の立場に立っても考えることができるようになるんですね。そして、おかしなもので、自分の良くない所にも目が向くんですよ、自然と。人間でおかしなものです。ゆとりがでてくると、いいところばかりにまず目を向けていて、そこからゆとりがでてくると自分の良くないところにもちらっと目が行くんですよ。おかしいですね。だから道徳の時間でね、子どもたちにその道徳心というのが高まっていくとなると自己評価も深まっていくんです。自分の良くないところも結構みんな深く見つめます。ただ、自分の良い所をしっかりと見つめながら、そこから良くない所に目が向く場合は、先ほどのないないづくしでずーっと良くない所ばかりに目を向けていることとは大いに異なります。なぜかという、この課題、つまり弱さ、これを乗り越えれば、まだどんどん自分の良さが伸びていくなと、そういう捉え方ができるんですよ。つまり、もっと言えば、その弱さに立ち向かうことが、自分の良さを伸ばしていくことになるよという風に考えるならば、弱さのあることが何も引け目にならないですよ。その弱さがあること自体が新しい自分を作っていくんだという。これに正対していけば、新しい自分ができていくんだというその意識を持てば、どんな状態でも、幸せな気持ちを持つことができるんじゃないですかね。これが第1点ですよ。

次に第2点。しかし、そうは言っても現実には甘くない、うまく行かず投げ出したくなることもあります。そういう時に何が必要かという、自分を認め、励ましてくれる人、これをしっかりと持つことが必要なんです。みなさん、それぞれ周りにおられると思います。でも、自分が本当に打ちひしがれている時、困っている時、それに適切にアドバイスいただけるかという必ずしもそうじゃないよね。これだけは言えないなとかなんかあるじゃないですか。友達だからこそ言えない的なこともあるかもしれませんね。しかし、やっぱり心の支えが必要なんです。つまり、落ち込んでいる、そういう時にね、そのままだったら幸福感をもてませんよね。実はその時に、心の支えをどうやって持つことができるかという、まずは、困っていた時に励ましてくれた人々を思い出してみましょ。それで、その励

ましてくれた人を思い出してみると、ああそうか、と対話ができるわけですよ。そうすると、困っている時に励ましてくれた、そしてそれを乗り越えたその人のことをだいたい思い出します。そうすると、その人と会話をするので、また元気になってくるわけですよ。あるいは、もう一度その人のことを感謝するという機会もそこにでてくるわけですよ。だからそこで、まさに落ち込んでいるからこそそういう人と出会えるんですね。そしてより深く会話ができるわけですよ。そして会話が楽しくなってくるじゃありませんか。そしてまた自分がリフレッシュしていくことができる。さらにまた、自分よりもっと過酷な状況の中で、それを乗り越えて生きている人々や先人、あるいは物語の主人公などに共感することによって、心の支えを得ることができます。つまり、心の師、心の支え、心の友をしっかりとって、苦しい時に心の師、心の友と対話ができるようにしていけば、どんな状況においてもその状況を、不幸と思うんじゃなくてむしろいい機会だ、好感をもってその場を迎えることができる、乗り越えることができるんじゃないですか。ということなんですよ。これはいろいろ体験を通してみなさん感じられることがあると思います。私も非常にあります。自分の心の支えとなる心の友、心の師をしっかりと心にもって、いろんな時に対話ができるように、そういう風に状況を自分で作っていくこと。一人じゃありませんから。

第3点は何かという、夢を持つことです。つまり、未来に対して希望を持つということですよ。これをどう考えるかということですが、今「プロフェッショナル」は終わりましたが、その前に「プロジェクト X」というNHKの番組がありました。あるいは今、いろいろな形でその人の人生を語る番組なんて人気がありますよね。それを見ていると必ず、成功している人も何らかの困難に直面しそれを乗り越えておられる。そんな困難な状況に直面していた時のことを司会者に尋ねられると、決まって、とっていいですね、一番充実していたんだとおっしゃるんですよ。なんでかという、要するに夢、その夢が大きければ大きいほど、そこに到達するためにはいろいろな苦労がある、困難がある、それを予測するわけですよ。だから、今周りから見て大変だなと思う状況にいたら、要するにこの状況を乗り越えれば、その夢に1歩も2歩も近づけるということじゃないですか。逆の捉え方をすればね。それは、その状況に対して意欲的に取り組める。落ち込むんじゃないってね。河合隼雄先生。この大学でも講演されたかもわかりませんね。臨床心理学の京都大学の先生であって、文部省、文部科学省で、文化庁長官をされていたんですね。僕もいろいろ教えていただいて、関わらせていただいたんですけども、その河合先生に一度こんな質問をしたことがあるんです。「先生はいろいろな子どもたちと接せられているけれども、いままで自分が対面したことのない

ような、カウンセリングしたことの無いような子どもが来られたら先生どうされますか」とこうお聞きしたんですね。そしたら、「押谷君、それはチャンスじゃないか」とこうおっしゃるんですね。どういうことかという、要するに、いままで自分の経験で対応できない子どもがいるということは、その子どもと正面から対応すれば、自分の中にある、まだ眠っている潜在的な能力が開花するかも知れませんよ。つまり、河合先生自身は、子どもたちの役に立ちたい、豊かな心を持って生活できるように、そういう子どもたちを育てて行きたいという目標があるわけですよ。そのことに関わって、いろいろ取り組んでこられた。だから、そういう風に、アドバイスできる、カウンセリングできる力をどんどん高めていきたいという目標をもっておられるわけですよ。そういうところからいって、今までの自分の体験で対応できないような子どもに出会ったということは、その子と対面して自分が関わって行けば、自分の中に眠っている潜在意識が顕在化するかもしれない。そう考えるんだよ押谷君ということです。この目の前の子どもは、宝物じゃない？自分にとってね。自分の新しい所を開発してくれるんだからね。そういう捉え方もできるんですね。これはみなさんと同じだと思うんですよ。みなさん、クラスの中にこの子がいなかったらいいなと思う子が正直にね、おられるかも知れませんよね。でも、そういう気持ちで行っていたら、絶対その場は楽しいなんて言えませんよね。でも、その子が自分の新しい可能性を開いてくれるんだとこう思ったら、宝物となるじゃないですか。あっ今日も彼が来てるな、今日も会えば宝物だってね。そういう風にすればね、その日、その場所がものすごく幸せに、あるいは充実感に満たされた場所になっていくじゃありませんかね、そういうことなんです。しかし、目標をしっかり持って、それに対して、一步一步自分が歩んでいるよというそういう自覚を持たなくちゃならないでしょ、ということですね。ここで何を言いたかったかという、三つのことです。つまり、自分のよさに目を向けて行きましょう、よさを広げるために弱さに立ち向かっていくというこういう姿勢。そして、感謝する心とともに、心の支えとなる心の師、心の友をしっかり持って常にコミュニケーションができるようにして行きましょう。そして、夢をもってまじめに生きる、つまり、夢に向かって着実に自分は歩んでいるんだという実感ができる、そういう生き方をしていきましょう。この三つですよ。実は、それは、これからの道徳教育で子どもたちに身につけて欲しい道徳性、道徳的姿勢と言ってもいいでしょうかね、生き方の姿勢でもあるんですよということを確認して欲しいんです。つまり、道徳教育の鏡である道徳の時間というのは、例えば思いやりの心とか、命を大切に作る心とか、くじけず努力する心とか、そういうところをみんなと一緒に学ぶわけですよ。その時に先生はどうでしょう。Aちゃんは思いやりの心はない、

Bちゃんは思いやりの心がある、そういうことを前提に指導しますかね？しませんよね。みんな同じ思いやりの心がある。そういうことを前提に指導するじゃありませんかね。つまり、みんなより良く生きようとしてますよ。そして、そういう良さをもっていますよ。でもBちゃんはその思いやりの心が大きな石でつぶされそうになっているかもしれない。でもなんとかそこから起き上がって行こうとするその心を、私たちは支えてあげることができるから、あるいは本人もそのことに気がついてそういうところを大切にしていこうと、大きな石があるけれども、まだそれをガツと押しつけることができないんだけどね、でも思いやりの心をね、しっかりと意識してくれるように。そういうことを願って指導するわけじゃありませんかね。まさに、自分の良さに目を向けていく、そして、良さを広げていくというその視点から、自分の弱さに立ち向かっていけるそういう子どもを育てていこう、これが道徳の時間の1番のポイントじゃありませんかね。

2番目のポイントは、道徳の時間は心に響く指導を行いましょうということです。心に響くとはどういうこと？心に残るとのことじゃありませんか。心に残ると言うのは、例えばそのために、魅力的な資料を使いましょうというわけですよ。資料が心に残ると言うことは、その内容なり主人公なりが心に残るとのことじゃありませんか。それは、授業が終わってもまたコミュニケーションが交わるとのことじゃありませんかね。例えばマザー・テレサの勉強をした。今日あんないいことできたらいいのになと思った。そこで終わりじゃなくって、家に帰ってもう一度、今日自分の一日の生活をマザー・テレサがもしアドバイスしてくれるとしたらどんなことを言ってくれるかな、あるいは、今日自分のやったことをマザー・テレサに報告するとすればどんなことが報告できるかなとか。例えばそんなことを考えたとしたら、マザー・テレサとコミュニケーションを交わしているということになるんじゃないですかね。そういったことで、もっとマザー・テレサを知りたいと本を読んだりする。そしてどんどんどんどんイメージが膨らんでくる。そうすると、どんな状況においてもマザー・テレサがアドバイスをしてくれるようになるんですよ。だからそういうきっかけを道徳の時間は与えられるよということ、心に響く資料を設定しましょうといっているわけですよ。

そして、3番目のことに関してです。道徳の時間というのは、例えば思いやりの心というのは、小学校1年生から中学校3年生まで、毎年指導するんですよ。あるいは、命を大切にしましょうということも、小学校1年生から中学校3年生まで毎年指導するんですよ。ということは、これは、知識理解の指導じゃないですよ。知識理解だったら、小学校1年生で終わってしまいますよね、覚えてしまいま

すから。しかし、それは毎年毎年繰り返すというのはどういうことかという、結局は、例えば思いやりの心、それがいろんな形で描かれる、そこで自分をもう一度見つめ直すわけですね。そして自分の価値意識に関わって、価値形成に関わって、どれだけ成長しているかな、そして、これからどんな課題があるのかな、それにどういうふうに取り組んでいけばいいのかな、ということを考えられるようにしていこうと道徳の時間にやるわけですね。価値意識を深めるようなことをやるわけですね。つまり、どうということかといったら、まさに人間形成、より良く生きるということに関わって、毎年毎年積み重なっていく、そのことを実感できるような指導を道徳の時間にやっていきましょう。週に1回なんだけれども積み重ねが大切ですよ。同じ内容を毎年指導するということは、やっぱりそれを見つめることをとおして去年よりも成長している自分、さらにこれから成長しなくちゃいけない自分、そこに課題を持つ。さらにそれを1年かかって、また1年たって、あるいは時間がたって自分を見つめ直して、さらに自分の成長を実感しつつ課題意識を持ってまた取り組んでいけるようにしていく。そしてそれを追い求めているということ、実感できる生き方ができるように、まさに道徳教育の要である道徳の時間にしっかりしていきましょうと提案されているわけですね。ということはどういうことでしょうか。まさに、道徳教育は、先生と子どもたちが一緒になって、こういう幸せな生き方、自分は幸せだと思えるような生き方的なことをしっかりと追い求めていく、そういう時間でもあるんですよ。そう考えれば、道徳の時間を大切にしたいなと思うわけじゃありませんかね。週1時間だけれども、それが積み重ならないといけないということになりますね。

じゃあ今度はレジュメの方に返ってください。次に学校の教育課程における道徳教育のポイント、これは、ちょっと押さえておきましょう。そこから、要である道徳の時間をどういうふうにやっていったらいいんでしょう。さらにそれをどう発展させたらいいんでしょう。そういう話をこれからやっていきます。まず、学校の教育課程における道徳教育のポイントを押さえようというわけなんですけれども。ご案内のとおり、道徳教育は学校教育全体の教育活動をとおして行うというのが基本になっています。それはどういうことなのか。いろいろな形で道徳教育、それぞれの生き方を考える、そういう指導が行われるわけなんですけれども、全教育活動をとおして道徳教育を行うというのは、何がポイントになるのかということ、実は学習指導要領にしっかりと書かれているんです。今度A判になりましたから、なかなか持って歩くのは大変なんですけれども、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領というのがあるじゃないですか。それを見てくださいと、第1章総則、第2章は各教科というのがありますね。各教科の内容を見て

いただきますと、まず、国語で見てくださいと、まず目標がありますね、そして内容がありますよね。各学年の目標および内容ということでいろいろ書かれていますね。いろいろずっと書かれてあって、最後が第3、指導計画の作成と内容の取扱いというのがあります。これはみなさん読むんだけれども、ここの1の最後、国語であれば、1の(7)になりますね、どう書いてあるか。第1章総則の第1の2、および第3章道徳の第1に示す道徳教育の目標に基づき、これはね、普通のことなんですけれども、道徳の時間との関連を考慮しながら、第3章道徳の第2に示す内容について国語科の特質に応じて適切な指導をすることと書いてあるんです。いろいろなことをしなくちゃいけないけれど、各教科における道徳教育は、ぜひおさえておかないといけないのは、第3章道徳の第2に示す内容、それが主になるわけではないですよ、それについて、国語だったら、国語科の特質に応じて適切に指導すること。国語科でこういう読み物、説明文についての指導がある、じゃあこれに関わってどういう道徳の内容項目と関わりがあるんだろうか、それを押さえて指導を行うことが各教科において道徳教育が求められることなんですよ、ということが書いてあるんです。つまり、ぼやーっとじゃなくて、この教科の学習に関わってどんな道徳的価値に関わっているんでしょうか、その価値をしっかり押さえようということなんです。さらに言えば、評価の問題におきましても、「各教科での関心・意欲・態度の評価」というのがあるんですけども、「その学習活動に関して自分の生活や価値意識との関連で捉えているかを中心に行う」必要がありますよ、そういうことも、全教育活動における道徳教育のポイント化をする一つの方法となりますよ、と。さらに、豊かな体験と言いますが、それは結局心が動く体験、感動体験などというわけなんですけれども、心が動く体験というのは、必ずその背景に道徳的価値があるんですね。例えば、小児ガンで死ぬと分かっている少女が、けなげにいろいろな活動をしている、それを見て僕は涙が出るわけじゃないですか。どうして出るのかといったらやっぱり命の荘厳性とか、そういうことを感じるからこそ涙が流れてくるわけですよ。つまり、心が動くというのは、そこに価値を感じるからこそ心が動くんですね。そうならば、いろいろな日常生活や学習活動において、心が動く「へー」とか「わー」とか「どうなっているんだろう」とか「へーそうだったの」という形で、心が動く体験をしっかり行うこと、それが、全教育活動を通しての道徳教育の基本なんですよ、と。そういうことを踏まえて、要である道徳の時間においては、道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を計画的・発展的に育むんですよ、と。つまり、道徳の時間は、道徳的実践をする時間ではないですよ、価値意識を深めていく時間なんですよ。ちょっとカッコ書きでかいておきましたところを見てください。「学校における道徳教育は最終的には自ら

感じ考え判断しながら道徳的实践のできる子どもを育てること」ですよ。内面は大切ですよ。内面だけしっかりやっていたらいいかというそうではなくって、やっぱりかわいそうだなと思うだけじゃなくって、かわいそうだな、じゃあ僕には何かできないかな、手助けしてあげよう、そこにいかないといけないよね。そうじゃないと世の中良くならないじゃないですか。僕はこうしたいと思っていたんだ、僕もそう思っていたんだ、でも何もしなかった。それでは何も変わらないですもんね。だけど実際に実践できる、ここに持って行かないといけませんよ。しかし、どうも先生方はまじめだから、実践までもっていかないといけないと言うと、実践の指導ばかりに重点が行ってしまう。つまり、実践というのは、こうしましょうああしましょうということですよ。となると押しつけ的になって結局自分からという実践は弱くなっていく。だから、道徳教育においては自律的な道徳性を身につけることというのが大きな課題として言われるわけじゃないですか。自律的というのは、自ら感じ考え判断し道徳的实践へと繋がっていく、そういう力ですよ。だからその部分を道徳の時間がしっかりと計画的に発展的に取り組むんです。他の教育活動における道徳教育が充実してきたら道徳の時間はいらんんじゃないですか、こういう人がいる。それに対してみなさんはどうでしょう。例えば自然愛ということで考えれば今その理科の授業の中で自然の仕組みについてとかね、自然の生態系とかについていろいろ学ぶでしょう。そこから自然愛的なものがしっかりと育まれる。道徳の時間で1時間から2時間でやってもそんな理科以上に自然愛を育てることはできない。だからもう、道徳の時間はいらんんじゃない、自然愛といって指導しなくていいんじゃない、ということになるでしょうか。そんなわけにはいかないんですね。つまり、今理科で自然愛を育てるといのは、自然愛を育てるためにやっているわけじゃないんですよ。理科の固有の学習活動の関わりの中で自然愛について指導しているわけですよ。そして道徳の時間は、自然愛について正面から学ぶんですよ。だから結局、教師の側からすれば、理科の授業で、こういう自然愛について深く学んだな、では日常生活はどうなんだろうか、日常生活の中でも植物を育てたりしている、そこでもこういう形で育てているな、そういうことを判断しながら道徳の時間でもう一度子どもたちの自然愛はどの程度育っているか確かめてみようとか、あるいはそこで、あつもうっかり育てているな、だったらもう大丈夫だ、でもこの子はまだ育っていない部分もある、じゃあサポートしていかなくちゃいけないな、という形で、各教科では各教科の目標なり内容が主にあって、それに関われる道徳的価値を学べるように考えるわけだから、道徳的価値そのものの正面から学んでいるわけじゃないんですよ。でも、我々がしっかり生きていくためには、基本的な道徳的価値とはどういうものなんだろうか、それが、

自分の中でどのように成長しているんだろうか、そういうことをしっかりと意識できる、そういう学習が必要じゃないですか。それをやるのが道徳の時間なんですよ。だから、1回でもいいからしっかりとやる。でもそのことにおいてどういう形でしっかりと育てているだろうか、そして子ども自身も、例えば自然愛というのが理科でいろいろやったりしてきている、それが去年自分が育んできたことがどうやって発達していくかな、あるいはこれからどういった形で取り組んでいったらいいかな、ということも考えてもらえるようにしていかなくちゃいけないんじゃないですか。そういうことをしっかりとやるのが道徳の時間なんですよ。

次に書いておきましたことは、道徳の時間というのが、道徳教育の要である、これをもう少し深く考えた時に、つまり、学校における道徳教育というのは、学級経営、学年経営の要、中核なんですよ、道徳教育というのは。さきほど教育基本法の中でお話ししましたが、教育の中で道徳教育というのは中心なんですよ。だとしたら、道徳教育の要である道徳の時間というのは、学校経営とか学年経営とか学級経営の要としての役割も果たせるようにしていかねばならないですよ。じゃあ何が必要かということ、学校経営の責任者である校長先生や教頭先生も道徳の時間に関わってもらわなくちゃいけないということになるわけじゃないですか。あるいは事務の方とかですね。あるいは給食等でやっていただいている方ですとか、そういった方にも何らかの形で道徳の時間に関わってもらわなければいけない。そういう形で広がっていかなくてはいけないということになりますよね。さらに、一人ひとりの豊かな自分づくり、つまり道徳性というのは人格の基盤になっているわけですから、その道徳性を養うのが道徳教育ならば、その要である道徳の時間は、一人ひとりの豊かな自分づくり、道徳性の育みにおいて要になるような役割を果たせるようになっていかねばなりませんよ。となると、1時間1時間の道徳の時間というのは、それで終わるのではなくって1年間で学んだことをもっとトータルとして自分の中にしっかりと意識できるようにしていかねばならない。つまり、小学校の低学年であれば16の内容項目がありますよね。中学年であれば18の内容項目がありますよね。高学年であれば22の内容項目があります。中学に行けば24の内容項目があります。それらの全体の視点から自分自身を見つめることができる。あるいは、1の視点、2の視点、3の視点、4の視点とあるじゃないですか。そういう視点から自分を見つめることができる。つまり、誰もがみんな価値意識をもって生きているんですよ。ところが、あの子は自分勝手やなとか、自分との関わりではしっかり頑張っているんだけど、友達と仲良くするという部分においてちょっと劣っている場合がありますよね。その子は、自分の価値意識を伸ばすんだとってくじけず努力するんだとい

って頑張ったとしてもみんなには認められないじゃないですか。その子にもうちょっと友達と仲良くすることも頑張っていけないといけないのかな、みんなの話聴いているとね、みんなはよくそういうところを取り組んでいるみたいだ、自分のくじけず努力するというのは同じようにはできないけれども、自分の人間関係のことも考えていけないといけないかなとか、そういう形で自分を見つめられた時に自分の幅が出てくるんじゃないですかね。そういう自分の見つめ方ができないといけないですよ。そういうこともしっかりできるようにならないと豊かな自分づくりの要とはなりません。そういう自分の見つめ方を道徳の時間でどのようにやったらいいんだろうかとなったときに、毎時間毎時間一行でもいいからノートを書かせておく。あるいは、心のノートに共感するページというのがありますから、今日学習したのはどの内容部分なのか、どの心かなという形で日にちと資料名を書いたりする。それを積み重ねていって全体を見ながらもう一度自分を見つめ直すということもあっていいと思うんですよ。

次に、学校・家庭・地域の連携の要とする。つまり、道徳教育というのは、学校・家庭・地域が連携した中で効果があるんだとみんなが思いますよね。だとしたら、学校・家庭・地域の連携の要となる道徳の時間を作っていくかといけないうことになるわけですよ。そんなことできるの？なんて言われるんですが、実は郷土資料とか学校資料、これを開発する、そしてそれを使った道徳の授業を考えてみる。これは大きな役割ですね。学校や地域にとってね。だって郷土資料というのは、郷土の自慢できるもの、それを取り上げて資料化するわけでしょう。つまり、その郷土資料というのは、地域のみなさんにとっても宝物じゃないですか。そしてまた、そこに生活する子どもたちにとっても宝物として欲しいものですよ。先生にとってもその学校に勤めたということはその地域にあるものを誇りに思えないといけないじゃないですか。だから、共通教材的なものになるわけですよ、郷土資料というのはね。だから、郷土資料を開発する時に、みなさんにいろいろ、地域の人にはよく知っているわけですからね、地域の人にいろいろ聞いたりしながら、あるいは総合的な学習の時間に子どもたちに調べさせたりしながら作ったりできるわけですよ。そうすると愛着がある、その資料にね。そしてその資料をもとにした授業をするときに地域の人に来ていただいてお話をさせていただくとかね、あるいは、そこで授業をした記録を保護者だけに配るんじゃなくて、PTAの人だけに配るんじゃなくて、地域全体に配ったりする。そうすると自分が知ることが資料になっているわけですね。そのことについて子どもたちに話に来てくれているわけだから。「おっ君らこんなことやってんの」という形で気楽に声をかけてくれることがあるかもしれませぬ。そういう形で道徳の時間を要としながら人々の交流が深まっていくわけ

じゃありませんかね。そういうことが可能ですよということね。

時間がありませんので大急ぎなんですけれども、じゃあそれで、道徳の授業、どう積み重ねられるようにしていくのかということなんですけれども。かいつまんで言えば、やっぱり心に響く感動的な資料を選定することですよ。みなさん、教材研究とした時に、例えば国語とか算数とか理科とかね、まず何を考えます？子どもたちがどれだけ理解できるかって考えるじゃないですか。当然のことね。ところが、僕は道徳の時間は、まあそれは大切なことですよ、と同時に、教師自身、あなた自身がこの資料をどう捉えるか、これをしっかり押さえておいてもらいたいと思います。というのは、道徳の時間の大きな特徴は、資料を使うことなんですよね。その資料を介して、先生と子どもたちの心の交流を図っていくわけですよ。その時にどうなるかという、その資料に描かれてある価値というものが子どもたちと先生との間で共有されているか、こういうことになるわけですよ。つまり、道徳の授業において、先生と子どもたちが心の交流を深めていかなければなりませんよ。そしてその中で価値意識がしっかりと育まれるようにしていく必要があるんですよ。そのために資料を扱うんですよ。だとしたら、その資料を先生がどのように捉えるか、どれだけ魅力を感じるか。子どもたちがその資料にどれだけ魅力を感じるか、それがポイントじゃないですか。そのことを通してお互いの心が触れ合っていく、深まっていくわけですよ。だから私は、教材研究においてまず、この使おうとする資料は私に何を訴えてくれるか、私はこの資料から何を学ぶか、それをまず押さえたらどうでしょう。それが私にとってこの資料の魅力ということでしょう。そうするとその資料が今日のねらいと合っているということであれば、その部分を子どもたちと一緒に話し合えれば狙いに迫っていけるということですよ、簡単に言えば。だとしたら今度は、子どもたちはこの資料をどう読むだろうか、私が今ここにこう訴えてくると思ったところに、子どもたちは、それを捉えられるだろう的な形ですね。今度は子どもたちの立場に立って考えてみる。その時に僕は、2、3人でいいから特定の子どもを意識して、その子がこの資料をどう読むか的な形で教材研究したらいいと思うのです。そこで、そこには引っかけられないかなとなれば、そこに引っかけられるように補助発問とか補助資料とかを用意するわけですよ。あるいは、特定の子に発問させるとか、特定の子に発言させるとかですよ。そういうことをやっていくわけでありませぬ。そういう教材研究を深めていくと、実はその教材研究の、授業をする以前において、子どもたちと先生の心の交流が始まっていますよ。そしてそれを授業の中で確かめていけばいいわけですよ。さらにそれがうまくいかなかったことを実感できればそれはなぜだろうかということをしっかり把握して事後の指導へと繋げていく

わけですよ。そういう教材研究をやっていただきたい。それと同時に、道徳で使われる資料、どんな資料でもね 1 回読んだだけでは心に残らないとしても、その行間にあるその部分をイメージ豊かに捉えられるようにしていくとどの資料も魅力的なものになっていくでしょう。一つ思い出話を話させて下さい。あの神戸の震災直後に知己の校長先生から、一度観に来てくれ、と言われたんです。伺ってみると、はじめは少し意外な感じがしました。それは、あまり上手と思われない、つまりね、新採用の先生レベルの授業だったんですね。だからみなさんも想像できるかもしれないですね。でも素晴らしい授業でした。どうして素晴らしいかという、子どもたちがどんどん発表してくれるんですよ。子どもたちは自分たちで、先生のちょっとした発言に対して子どもたちはどんどん発言を繋いでいくくれる、深めてくれるんですよ。素晴らしいなと思ってね。あなたと先生とでどうしてこんな子たちになったんですかってね。それを見て欲しかったから押谷さんと呼んだんだよってね。震災後に 5 年生を受け持ってもらったのに 4 月の段階で子どもたちは何も言うことを聞かなかった、もう学級崩壊みたいなそんなクラスだったって言うんですね。それでその先生、一つだけ約束しようって言うんですね。いろいろなことをしないとイケないけれど、道徳の時間はしっかりやるようにしようってね。つまり、聞いてくれなくとも、道徳の時間はしっかりやる。そのための教材研究を土曜日に、それも一番最初に道徳の教材研究をやる。その時に一枚ものとか、あるいは、大きくプリントを拡大コピーとかして貼るとかね、そういう教材研究があるんですよ。それで、もう一つおっしゃったんですよ。必ず道徳の授業をやる。そのための教材研究を土曜日に必ずやる。それでもう一つおっしゃったのは、その時に使った資料を拡大コピーして教室に貼っておく。この三つのことをおっしゃったんですよ。それを先生はズーッと実行される。つまり、道徳の時間をしっかりとやっても、子どもたちは聞いてくれない、でも、その資料を貼っていくんですよ。2 週間貼っておくんですよ。つまり 2 時間分貼るわけですよ。2 週間たったら一つ取るわけですよ。それで新しいものが貼られていく。そのあとどうするかというと、取ったその資料の日付と資料名と狙いですよ、それを小さい短冊に書いて教室の上の壁の所にズーッと貼っていくんですよ。つまり、毎時間道徳でやったことが積み重なっていることが実感できるわけですよ。それで、道徳の資料って良いことが書いてあるじゃないですか。みんな、こんなこと照れくさいかもしれませんが、やっぱりみんな好きなんです。道徳のああいう良いこと書いてあるから、こういうことあったらいいのにな、みんなそれぞれ思うんですよ。それが、実は教室に貼ってあると知らず知らずのうちに見るんですよ。道徳の時間に聞いていなくても、あるいは、聞いていてももう一度また確認するんですよ。

その時に、やっぱり先生もそれを見たら、せっかく貼っているんだからね、いろいろな時に話をするわけじゃないですか。朝の会とか帰りの会とかでね。そうすると子どもたちはそれを意識してくれるようになってね。結局、そういうことをやっている、学級の雰囲気、道徳の資料を徐々に取り入れたものになっていくっていうんですよ。そして子どもたちがどんどん発言してくれるようになってくる。そしたらこっちが言わなくても道徳心が養われていくんでしょうかね。その成果が 2 学期の最初だったんですけれどもね。へーっと思ってびっくりいたしました。こんな力があるんだと。それは先生の真摯な姿勢と、やっぱり資料の力ということなんじゃないですかね。もうちょっと、ひとつ話したいことがあったんですけれどもそれはまたいろいろな機会です話すと、一応まとまった話はこれで終わりにしたいと思います。どうも失礼しました。

○全員

(拍手)

○司会

大学院生とか 4 年生は、3 年前から 4 年前の 1 年生か 2 年生の時に受けた、私の道徳教育の授業の 15 回分をはるかに凌駕する充実したお話だったと思います。

前半は、ご自身の話から始まりまして、改訂された教育基本法の理念と道徳教育の関係を要点をまとめてお話いただきました。

後半は、教育現場の具体的な話。道徳は教育課程全体で行うだけけれども、週に 1 時間道徳の時間が設けられている、そういう週に 1 時間の道徳の時間をどういう風に展開していくかというような話でしたね。分かりやすくお話いただけたと思います。この場におられる学生さんは来年、もしくは近い将来に、おそらく教壇に立ってですね、教育現場で教育していく立場になられると思いますけれども、そのためにもいろいろと役に立つお話ではなかったかと思います。120 分、ご静聴ありがとうございました。あまり時間はないんですが、質疑の時間も少しは取りたいと思っていますので、学生さん、院生のみなさん、これを機会に意見を聞いてみてください。何でも結構ですので。今のお話に関わる、関わらない関係なく質問をいただけたらと思いますがいかがでしょうか。ありませんか。あまりに中身が濃かったのです。

○押谷由夫

ごめんなさいね。もう一つ言いたいことがあったんですけど、やめておきます。

○司会

どうですか。また後で気がつかれましたら私経由で押谷先生に質問したりもできますので、何かありましたら私の方へお願いします。

○押谷由夫

おそらくね、みなさん現場に行かれたら、打ちひしがれ

ることがたくさんあると思います。自分のプライドもなにもあったもんじゃないですからね。佐藤先生も私もね。最初の授業では、馬鹿にされたような気がするんですね、聞いてくれないということはね。ほんとに自分の人格を否定されているようなそんな時期を経て 60 歳になるということなんですけれどね。みなさんね、うまくいく年度があるかもしれないけれども、必ず何人かは自分の方を見てくれない子とか、わーわー一言ってくれたりします。なんで分からないのと言いたくなるようなそういう状況というのは絶対あると思う。それで保護者からがちゃがちゃ言われるでしょ。もう自分のプライドも何もあったもんじゃない。でも、そこを乗り越えることによって、いい先生になっていくと思います。どうやって乗り越えるかという時に、僕の反省も込めているんですけども、先生って何か教えなければならぬっていう感じがあるじゃない。この子なんとかしなきゃいけないとかそういう気持ちを持つでしょ。そうすると相手にとってはそれがプレッシャーになるんですよ。だからもう、僕にはそんな力ないよとね。ただ、僕のやれることはなにかといたら、あなたの話を聞いてあげることではできますよと。どの子もみんなより良く生きようとしているんだと、おおらかな気持ちを持って。その子はいつも人格を無視するようなことを投げかけてくる。それはもうえげつ言葉も、関西だったら特に出しますよ、もう泣けてくる。家で泣いたりもしている。でもやっぱり、

おおらかな気持ちを持って、その話を聞いてあげようと、そういう風に思っているだけで絶対に落ち着いてくる。つまり、道徳教育というのはある意味相手を信じることですね。とにかく相手はより良く生きようとしているんだよ、私もかなり良くなるよ、でもね、そこで相手に何かしてあげようじゃなくって、相手とそれを共有しながら、お互いに楽になれないかなという気持ちでできたらいいんじゃないかな。絶対いい先生になれると思います。そういうところがうまくいってきたら、道徳教育の価値的なところをもっと取り組んで行けると思います。教えてあげなければいけないとか、そういう意識を強く持ってしまうとダメだと思います。でもそれは体験を通して学んでいけると思いますが。ということで、自らの道徳教育をしっかりと取り組んでいただけたらと思います。ごめんなさいね。みなさん真剣に聞いて下さって本当にうれしかったです。よろしくお願ひします。ありがとうございました。

○全員

(拍手)

○司会

今日のセミナーはこれで終わります。どうもありがとうございました。

○全員

ありがとうございました。

(文責：佐藤幸治)